

『聖なるものをめぐる哲学 ミルチャ・エリアーデ』

マルセリーノ・アヒース=ビリャベルデ著 (平田 渡 訳)、関西大学出版部、2013 年

宗教学者ミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade 1907～1986) は、20 世紀を代表する宗教学者として、わが国でも広く知られている。ルーマニア出身のエリアーデは、シカゴ大学教授としてアメリカ宗教学界ばかりでなく、世界の宗教学界に大きな影響力を及ぼした。本書はそのエリアーデの膨大な著作を丹念にひもとき、その宗教思想と方法論を読み解くことによって、「聖なるもの」をめぐるエリアーデ宗教学の全体像を明らかにしたものである。

著者は現代のスペインを代表する哲学者の一人、マルセリーノ・アヒース=ビリャベルデ (Marcelino Agis Villaverde 1963～) である。同氏はスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学教授であり、以前に同大学の副学長を務めた経験をもつ。シカゴ大学留学の経験もあり、エリアーデの友人でシカゴ大学教授でもあった哲学者ポール・リクールの弟子でもある。著者が教えるサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学は、その大学名が示唆するように、スペイン北西部のサンティアゴ・デ・コンポステーラに位置する。この地はキリスト教の三大聖地の一つで、中世から続く巡礼の道の終点である。同氏はこれまでに数回、来日したことがあり、日本の研究者のあいだに知り合いも多い。

本書の原書 *Mircea Eliade: Una Filosofía de lo Sagrado* (原題「ミルチャ・エリアーデ—聖なるものの哲学」) は、1991 年に著者が 28 歳のとき、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学出版局より出版したものである。その当時、世界の宗教学界では、エリアーデ批判が盛んに行われていたが、そうした中で、若き著者がエリアーデ宗教学の全体像を解釈学的に明らかにしようと試みたことは注目すべきであろう。エリアーデ宗教学の再評価が進む今日、スペインの学界で広く読まれてきた本書が、このたび、スペインの言語文化に精通している平田渡教授 (関西大学) によって邦訳されたことの学的意義は極めて大きい。

ここではまず、本書の内容を把握するために、おこなった章構成を記しておきたい。

まえがき

第一章 人と作品

- I 伝記に関する簡潔なメモ
- II 作品を理解するために必要な要素

第二章 聖なるものへの最初のアプローチ

- I 聖なるもの対俗なるもの
- II 聖体顕現

第三章 シンボルと神話における聖なるもの

- I シンボルと文化
- II 神話

第四章 空間と時間における聖なるもの

- I 聖なる空間
- II 聖なる時間

結び

第一章では、エリアーデの学問的貢献を理解するために、生

涯にわたる宗教学理論のおもな展開を論じている。インドにおいてエリアーデは初めて、生きたインド哲学や「聖なるもの」の体験を得た。著者はインド体験が彼の鍵概念「宗教的シンボリズム」の発見へと導いたと論じる。またインド体験が「アルカイック (古代的)」社会の人間を「宗教的人間 (ホモ・レリギオース)」として解釈す



ることに気づく契機にもなったともいう。エリアーデ宗教学を貫く方法論を、著者は現象学的視座としてとらえ、「還元主義」と「事象そのものへ」という主要な方法に沿って論じる。エリアーデは「聖なるものの弁証法」と「宗教的シンボリズム」を方法論の中核として、聖なるものの意味を把握しようとした。

第二章では、俗なるものと対立する聖なるものの特徴を論じることによって、著者はエリアーデのいう「聖なるもの」の「構造とかたち」、「還元できないこと」さらに「両義性と弁証法」を明らかにする。著者によれば、エリアーデは聖なるものが他に還元できないことを強調した。宗教現象は聖なるものを中心に、還元できないかたちで捉えられ、また聖なるものの両義性は聖なるものの弁証法において形成されている。著者は聖体顕現 (ヒエロファニー) の構造とその特徴を、エリアーデの宗教論に沿って具体的に明らかにしている。

さらに第三章では、シンボルと神話における聖なるもの、また第四章では、空間と時間における聖なるものの特徴を論じる。最後に結びでは、エリアーデのいう「新しいユマニズム (ヒューマニズム)」の現代的意義を論じている。著者が強調するように、「聖なるもの」は原初の出来事を身近なものとして感じさせる役割をもつ。こうした議論を踏まえて、著者は言う。エリアーデ宗教学は「聖なるものが、主要な存在の基準になっている社会の人間について、総合的に把握することを試みたもの」である。

最後に、この邦訳書には、宗教学的に少し不適切な和訳がみられるものの、本書が訳書であることを感じさせないほど、とても読みやすい。ただ、原著の注記が邦訳されなかったことは残念である。本書の読者は、議論の典拠を参照しようとするとき、かなり不便さを感じるであろう。ともあれ、本書は現代スペインを代表する哲学者によるエリアーデ宗教学の優れた概説書であるばかりでなく、現代社会において、「人間とはなにか」を考えるうえで、大変示唆に富む好著である。ぜひ一読をお勧めしたい。